

# 人文学・社会科学特別委員会（第29回 R7.12.26）に おける主な意見

令和8年 3月10日

文部科学省研究振興局振興企画課学術企画室

## <コプト語AIの運用コストについて>

- コプト語AIを一般公開していたときには、意味のない入力になされることでAPI利用料が逼迫していた。そのため、メール申請に基づくユーザー管理に切り替えたところ、真に学術的であったり、言語復興運動のための利用に絞ることができ、利用料を抑えることができた。

## <コプト語AIにおける研究基盤の存在意義について>

- コプト語AIの製作において最も効果的なものは構造化した辞書データだった。非デジタル化時代の危機言語研究で定石であった文法書・辞書・テキストの3点セットについては、AI時代においても引き続き重要。

## <AI利活用における課題>

- AIは文法についてかなり正確に扱えるようになってきている一方、専門用語の理解は未だ不十分。ビクテックはその部分に対して優先的に補完させようとはしていないと思われるので、人文学の研究者がコミットしてAIの専門性の強化させる必要がある。

## <AIによる国際的なコミュニケーションの変化について>

- 国際会議においてプレゼンターは母語で話し、横にリアルタイム翻訳が表示されるなど、研究コミュニケーションにおける多言語化がAIによって進んでいる印象。そういった側面においてもやはり専門用語を適切に取り扱えるようにすることが重要となる。
- コプト語研究における学術的なコミュニケーションは英語で行っているため、そこまで不便を感じていない。一方、現地調査のときの現場の方とのコミュニケーションは様々な言語、方言で行うことになるが、そこをAIでカバーするには至れていないため、将来的にカバーできるようになることを期待している。

## <AIによるコミュニティの拡大について>

- AIを活用してコプト語の楽曲やアバターを作成して公開したり、SNSでアピールしたことで、言語復興運動家とつながりを持つようになるなど協力者が増えていき、国際的なコミュニティも広がっていった。

## <AI研究に関する研究者の育成について>

- 自分は国際標準規格等のデータ基盤の構築に必要なスキルやAI研究の基礎を海外で習得したが、日本でもそういったことを学べる環境が増えてほしい。
- 中規模、小規模大学で人文学・社会科学におけるAIについて学ぶ場を設けることは難しいと思われるが、サマースクールで指導者を育成するといったところから始めると良いのではないか。
- 既に学生にAIが浸透している現代において大学や大学院が行うAI教育は、AIのメカニズムや、できることとできないことの境界線を理解させ、AIとの適切な距離感を習得させるものであるべきだろう。
- AIの動作原理を理解しているか否かで、その人が入力するプロンプトもAIの出力結果も変わってくる。AIは使う人の鏡のようなものであるため、その仕組みや使い方を教育し能力として習得させることは重要。
- AIはデータを追加することである意味成長するもの。単にAIが出力したデータを享受するだけでなく、AIをトレーニングし、その結果を人文学的に振り返るといった体験を通じて、人文学者は単なるAIのユーザーに留まらないと認識することは人材育成という観点において重要。
- 情報学的な技術について人文学の言葉で説明することや、人文学の学術課題を情報学的に説明することは難しく、それなりの知識や経験が必要。それらが備わっていないと情報系と人文系の相互交流は難しい。

## <AI時代における研究者どうし（人社研究者と人社研究者、人社研究者と情報学者、等）の関係について>

- 人文学が積み上げた知にはコストは掛かっている。人文学の外側にいる者はそのことへのリスペクトを持ったうえで、その知をどのようにAIなどへ活用することができるのかコミュニケーションをとっていくべき。
- AI利活用のためにはシステムを作る人と使う人の双方の対話やコミュニケーションが必要。さらには、作成されたデータやシステムの適切性を人文学の専門知で評価する枠組みが必要。

## ＜AI利活用における人文学・社会科学研究者の役割＞

- 特にマイナーな言語においては、特定の単語どうしがつながる文化的な背景（「吾輩は」⇔「猫である」）もAIに学習させる必要がある。さらには、AIが何を取り込んでいるのかが分からないことが問題や不信感を引き起こしていると思われるため、AIが学習するに相応しいオープンなデータを人文学者が構築してAIを支えることが必要。

## ＜人文学・社会科学におけるAI利活用の展望（事務局作成資料）について＞

- AIは人文学の持つ意義・価値を再発見する効果があることを追加すべき。

## ＜委員会での議論に係る広報について＞

- 人文学でAI利活用が進んでいることを国民はほとんど知らないのではないか。委員会でなされている議論についてもっと積極的にメディアリレーションすべき。

## ＜その他＞

- 日本の古典研究においては、日本語と中国語の文献どうしの関係性や、とある古典が後世にどのような影響を与えたのか、といったテーマにおいてAIの真価を発揮できるのではないか。
- 日本語などの特定の言語に特化したAIより、多言語モデルのAIをローカルでファインチューニングする方が適切かつ高性能なAIになるのではないか。